

北陸学院保育短期大学附属幼稚園における身体表現活動 －「リズム」の活動に着目して－

Physical Expression Activities at Hokuriku Gakuin Junior College Kindergartens － Focus on “Rhythm” Activities －

田 邊 圭 子*¹、出 村 るり子*²

要旨

本稿は、北陸学院保育短期大学附属幼稚園の元教師にインタビューを行い、「リズム」をどのように理解し、保育の中でどのように展開されたのかについて、明らかにするものである。

一般的な幼稚園では遊戯が行われているのに対して、北陸学院保育短期大学附属幼稚園では、子ども自身が音楽を聞いて、自分の中から出てくる活動が重んじられる等、同園の教師が「リズム」を十分に理解し、具体的な活動として実践していたことが示された。

キーワード：リズム (rhythm) / 身体表現 (physical expression) /

北陸学院短期大学附属幼稚園 (kindergarten attached to Hokuriku Gakuin Junior College)

I 問題の所在

現在、幼児教育において、身体表現に関する内容は、領域「表現」で取り扱われているが、平成元年の『幼稚園教育要領』の改訂までは、領域「音楽リズム」に位置づけられていた。しかし、領域「音楽リズム」において、身体表現は音楽教育または音楽に付随するものと理解されることがあったと報告されている¹⁾²⁾。そのため、領域「音楽リズム」で用いられた「動きのリズム」という用語も、音楽教育の用語または音楽に付随する用語として理解されるなど、混乱を招く用語となった。

拙稿³⁾⁴⁾より、「音楽リズム」という領域名は、元々「音楽」と「リズム」であり、「リズム」は音楽ではなく身体による表現を指すものであったことを報告した。「リズム」という用語は、戦後、連合国軍総司令部民間情報教育局 (CIE) の顧問であった、H.ヘファナンが示した資料

「Modern Developments in Kindergarten Education」に記載されていた保育内容の項目“Rhythms”をヒントに坂元彦太郎が提案した用語である。坂元は、戦前の型にはまった「遊戯」を刷新し、「リズム」を心身から湧き出る律動を身体で表現する用語にしようとして試みたのである。このことにより、「リズム」は『保育要領』(昭和23年)に記載されるが、記載内容は坂元の意図が理解されず、不満を抱くものであった⁵⁾。その後、坂元は保育要領で、「中途半端に産み落とした『リズム』をなんとか目鼻をつけたり、成長させたり」し、「戦前の『お遊戯』をもっと近代的で、教育的なものにかえよという考え」を持ち、昭和23年9月に保育要領改訂委員会を立ち上げた⁶⁾。同委員会は昭和28年2月に『幼稚園のための指導書 音楽リズム』を刊行するまでの間に、「リズム」に代わる「動きのリズム」という用語を生み出した。しかし保育現場では、「動きのリズム」を十分理解することができず、従来の遊戯が行われていたことが窺える。同書は後に、昭和31年に刊行された『幼稚園教育要領』の領域「音楽リズム」の指導書として位置づけられる。しかし、協議された資料の内容が十分に示されず、そのことが「動き

*¹ TANABE, Keiko

北陸学院大学 人間総合学部 子ども教育学科
身体表現、保育内容・表現指導法、表現活動

*² DEMURA, Ruriko

北陸学院第一幼稚園

のリズム」を音楽に付随するものと理解され、身体表現の用語と十分に理解されず、混乱を招く一因になったという背景がある⁷⁾。

このような「リズム」をめぐる日本の保育界の動向とは別に、西洋の影響を受けながら独自の保育における「リズム」の位置づけをしていた幼稚園に英和幼稚園がある。それは、英和幼稚園の園児(明治23年頃)であった越野まさか、娘の節子に当時の園について語ったメモの中に「雪ふかい北陸で冬が長く室内で楽しく過ごさせるためにいろいろと遊びが工夫されていた。リズムでもオルガンにあわせ、男子は長箒を女子は扇子を持ったりして活発に楽しく遊んだ⁸⁾という「リズム」の記載がみられることから示される。英和幼稚園は、明治19年(1886年)に女性宣教師ミス・フランシナ・E・ポートルにより開設された現存する日本で最古のキリスト教幼稚園であり、現在の北陸学院第一幼稚園である。北陸学院の幼稚園(現在は第一幼稚園と扇が丘幼稚園の2園ある)では、今も「リズム」が身体的な活動として行われていることから、英和幼稚園時代から何らかの保育実践が継承されているのではないかと考えることができる。しかし、それに関する具体的な確証は筆者らの知る限り、現時点では得られていない。

II 研究の目的と方法

1. 研究の目的

前述したように、日本では「リズム」、「動きのリズム」共に、保育現場では身体による自由な表現として十分に理解されず、戦前から続く遊戯を刷新するまでには至らなかった。しかし、明治23年頃には英和幼稚園で「リズム」という活動が行われており、現在も北陸学院の幼稚園では「リズム」という身体による自由表現活動が行われている。これを英和幼稚園から現在まで続けていたと仮定するならば、その要因として、現場教員間で具体的な保育活動が受け継がれたことに加え、現場教員に影響を与えた何らかの要因が考えられる。

そこで本研究では、北陸学院における最初の保育者養成校である北陸学院保育短期大学を卒業した北陸学院保育短期大学付属幼稚園の元教師か

ら、同幼稚園において「リズム」をどのように理解し、具体的にどのような活動を展開してきたのかについて、インタビュー調査を行い、明らかにすることを目的とする。

2. 研究の方法

北陸学院は、昭和25年(1950年)に養成校として北陸学院保育短期大学を開校し、現在に至る。インタビューは同短期大学の1回生から9回生の内、北陸学院の付属幼稚園において主任経験のある元幼稚園教諭(女性)3名(M氏、A氏、Y氏)に行った。対象者を同短期大学卒業生に限定したのは、それ以前の幼稚園教諭の所在を確認することができなかったからである。

対象者には、事前に調査の目的について書面と電話で説明をし、インタビューの同意を書面にて得た。しかし対象者から、1対1で行うインタビューよりも全員で話をする方が、保育を回顧しやすいという申し出があり、対象者3名と筆者2名の5名によるフォーカス・グループ・インタビューで実施した。この方法を取り入れた理論的根拠としては、参加者同士の相互作用により、比較的短時間で実質的な情報を引き出すことが可能なことがある。また、「リズム」に関する内容に限定すると話しにくいということであったため、対象者の話の流れを重視しながら、「リズム」に関する質問(例 幼稚園ではどのような「リズム」の活動をしていたのですか。活動中に先生はどのような言葉がけをしたのですか。等)、「リズム」に関する質問を挟むように進め、幼稚園教諭時代の保育について自由に語っていただいた。

インタビューは、2021年7月29日、北陸学院第一幼稚園のホールにおいて、コロナ感染に十分留意しながら実施した。所要時間は3時間であり、全ての会話をICレコーダーに録音した。また録音テープに基づき、逐語録を作成した。

なお、本研究は北陸学院大学倫理審査委員会の承認を得て実施された。

III 北陸学院保育短期大学付属幼稚園

1. 北陸学院保育短期大学付属幼稚園

昭和25年(1950年)3月、北陸学院保育短期大学(以下、保育短期大学と記載)設置の許可が文

部省から下り、北陸学院幼稚園は北陸学院保育短期大学附属幼稚園になる。保育短期大学開学により、保育短期大学において、北陸学院の幼稚園教諭の養成が可能になった。

保育短期大学の校舎は幼稚園の園舎の2階に作られ、幼稚園と同居する形で授業が行われた。

保育短期大学開学の前年、初代学長のミス・A・アイリン・ライザー（以下、ライザーと記載）はミセス・ロエナ・ハドソン・ウィン（以下、ウィンと記載）と南信子（以下、南と記載）を保育短期大学に招聘している。

北陸学院保育短期大学附属幼稚園は、昭和28年（1953年）4月北陸学院保育短期大学附属第一幼稚園に改名する。それは、新たに北陸学院保育短期大学附属第二幼稚園が別の場所に開設されたからである。また、翌年には、北陸学院保育短期大学彦三幼稚園も開設された。

昭和29年（1954年）5月、保育短期大学に講堂を新築するに当たり、2階を講堂とし、1階にナースリースクールが始められた。ナースリースクール開設は南の提案により実現したようである⁹⁾。

ナースリースクールとは、子供部屋の意味であり、ヨーロッパやアメリカの家庭のために、特別の部屋を設け、睡眠、食事、遊び等一切の生活をこの部屋ですることから名付けられている¹⁰⁾。ナースリースクールは、幼稚園入園前の2～3歳までの幼児の施設であり、3年保育の3歳児とは異なる。そのため、ナースリースクールには独立した園舎と運動場、遊具が整えられ、2～3歳の子どもの発達にふさわしい保育が行われた。

北陸学院保育短期大学附属幼稚園は、第一幼稚園、ナースリースクール、第二幼稚園、彦三幼稚園であった。以下この4園を附属幼稚園と記載する。

2. 附属幼稚園と保育短期大学教員

インタビューの中でM氏、A氏、Y氏からライザー、ウィン、南に関する話題が出た。そこで、以下にこの3名の略歴とインタビューで話された内容について記載する。

(1) ライザーについて

ライザーは、アルマ・カレッジで幼児教育を専

攻した後、アメリカの公立幼稚園で働いた。その後シカゴ大学の修士課程で教育理論を学び、ノースダコタにある師範学校で幼児教育の教授法を教えていた¹¹⁾。大正10年（1921年）より、附属幼稚園の前身である北陸女学校附属幼稚園の園長となる。ライザーは、幼稚園の教師たちに指導を徹底すると共に、子どもについての研究グループを組織するなど活発に活動を行っている¹²⁾。また、健康教育を重視し、幼稚園で園児に牛乳を与えるとという北陸地方初の試みも行っている¹³⁾。時局の悪化に伴い、昭和16年（1941年）にアメリカに帰国するが、終戦後日本に戻り、昭和22年（1947年）園長に就任する。保育短期大学にウィンと南を招聘するなど、保育短期大学開校はライザーの功績に負うところが大きい。

M氏、A氏によれば、ライザーは「しっとりとしていて、どっしりとしていて、学者タイプの先生」であった。幼稚園の母の会や保護者会で保護者と親しく交わり、親たちもライザーを慕っていたそうである。ライザーは静かなタイプであるが、子ども達を大事にする人だったと語ってくれた。

(2) ウィンについて

ウィンは米国のスミスカレッジでナースリースクールのコースを担当した権威であった¹⁴⁾。前述の通り、北陸学院では、昭和29年（1954年）5月にナースリースクールが始められるが、ウィンは保育短期大学教授として心理学とナースリースクールの教育を教えながら¹⁵⁾、ナースリースクールの園長を兼務した。

M氏によれば、ナースリースクール開設時の2名の教諭のことをウィンは「私の双子」と言ってもかわいがってくれたそうである。ナースリー開設当時、幼稚園教育では2年保育が普通であったため、ナースリースクールは注目された。ウィン氏も「私のナースリー、私のナースリー」と言ってもごく誇りに思っており、教師達にはナースリースクールの保育が3年保育の3歳児の保育と同じにならないようにと言っていたようである。また、ウィン自ら一週間に1回ナースリースクールの子供達にお話をし、礼拝では讃美歌を歌い、ピアノも弾いてくれた。ピアノが得意な

ウインは、子ども達が各々のマットの上で休む休憩の時間に子守唄を弾き、子ども達はそれを聞きながら静かに休んでいたそうである。

(3) 南について

南は、ランバス女学院（旧聖和大学、現関西学院大学）保育専修部と研究科で学び、ランバス女学院の「自由主義保育」の実際の保育を担当した立花富に影響を受けている¹⁶⁾。南は、聖和女子学院の保育学部で教えると共に聖和女子学院附属聖和幼稚園で主任を勤めている¹⁷⁾。また、同幼稚園で主任をしていた頃、南の保育を参観したCIE顧問のH.ヘファナンから賛辞を受けている¹⁸⁾。ヘファナンは『保育要領』作成に直接関与した人物である。

ライザーが南を招聘した理由は、保育短期大学開学に加え、北陸学院の幼稚園の形骸化したフレール保育を一新させるためであった¹⁹⁾。南が来てからの北陸学院の幼稚園の保育は、「教え込む保育から、自立性を大切に、個性を尊重し、園児の考えを重んじ、引き出し、伸び伸びとした保育に少しずつ」変わって行ったことが語られている²⁰⁾。

M氏によれば南は、大学で教えたことを付属幼稚園で実践することを願っており、それが現場の教師の役割でもあった。月に1回付属幼稚園の全教師が集まり自分の保育を南の前で報告する教師会についてY氏は、自分の保育で足りないところを南に補ってもらい、時には叱られることもある場であったことを語っている。しかし、南の考えは「ずしーっと」重みがあり、教師会で付属幼稚園の教師は育てられたと語ってくれた。

3. 金沢市内の他のキリスト教主義幼稚園と南の保育の違い

M氏、A氏、Y氏が見た、金沢市内の他のキリスト教主義幼稚園と南の保育の違いについて、次のように描写している。その頃は、金沢市内のキリスト教主義幼稚園では、自由遊びが終わってから降園までの間、子ども達は大きな椅子を円周上に並べて座り、全ての活動がその中で行われるものであった。司会の教師に指名された数名の子どもが円の中で少し活動し、活動し終わったら座る

という形態であった。そのため座っている時間が長くなり、集中できなくなってしまった子どもたちに対して、補助の教師たちは円の外に座り、静かにさせるといったキリスト教保育の伝統的なプログラムが行われていたとのことである。A氏は自分たちが保育短期大学の授業で学んできたことは随分違うと思ったそうである。

IV 付属幼稚園における身体表現活動

インタビューは、対象者3名と筆者2名の5名によるフォーカス・グループ・インタビューで実施した。なお、話の前後の関係で主語等抜けている言葉については（ ）で補足説明を加えた。

1. 音楽を媒体とした「リズム」の活動

「リズム」の活動における音楽について、以下のように語られた。

(1) M氏のナースリースクールでの「リズム」の活動における音楽

M氏は、ナースリースクール開設時をよく知る幼稚園教諭である。M氏がウインと南から学んだことやリズムで大切にしていたことについて以下のように語ってくれた。

M：その頃（ナースリースクール開設時）はね、一般的には（他の幼稚園では）、音楽の活動と言ったらお遊戯を先生が見本を示して、それと同じようなことをするという活動と言ったらいいかな、そんなのでしたけれども、(a)北陸学院では、子ども自身が音楽を聞いて、自分の中から出てくる活動と言うか、そういうのを重んじていましたね。

問：ナースリースクールの子供達達が音楽を聴いて？

M：まあ、(b)第一幼稚園でも5歳ぐらいになると、いろいろな課題を与えて、それに自分で答えられるような教育、先生が教え込むのではなく自発的に子どもの中から生まれてくるものを重んじる。だから、(c)ナースリースクールでもいろいろな音楽を聞きながら、子ども達は自由に表現するっていうそういうのがいわゆる、まあ、簡単に言えば音楽リズムの活動でしたね。

問：2歳の子供達に音楽を聞かせて「一緒に動

きましょう」と言うのですか。

M：そう、レコードかけたりしてね。もちろん先生も一緒に、先生も感じる。その感じたものを表現する。先生がやってみるからその通りやってみなさいというのではなく、^(d)先生は先生自身が感じたものを表現する。私がナースリーにいた頃は、ウィン先生のお考えによる保育観というか保育方法。決してウィン先生は私達に強制はなさいませんでしたけれど、基本的には、音楽を楽しむっていう、楽しんで受け止めたものを子ども達の中から出てくる表現力っていうことが音楽リズムの活動だったと思いますね。

問：2歳の子どもでもできるのですか。

M：^(e)2歳の子どもだから、形は見たら、どの音楽を聴いても同じに見えるかもしれないですけど、子ども自身が音楽を感じて自分のからだを使って表現する。そういうことを大切にしていたと思います。教え込むのではなくてね。その頃、お遊戯とかいってね、(他の多くの)幼稚園で、いろんな歌の、歌を聞きながら何か仕草をするのがお遊戯。だからみんな同じことをやることになりますよね。先生がお手本を示して、「こういうふうにやりましょう」と強制する。^(f)子どもの自由な感じ方とか発想とかそういうものを、とにかく大切にする保育というのが、私がウィン先生から教わった、南先生からは理論として教わったこと。そしてそれを実践する。それが現場にいる人達の役割だったんですよね。音楽、「リズム」活動を先生が^(g)子ども達に「このようにしなさい」っていうのではなくて、感じさせる、感じ取らせるっていうか、そういう意味で^(h)先生や実習生の立場の人が、自分が感じたことを表現するのを見て、子どもが自分も感じたことを表現する。⁽ⁱ⁾だから、みんな同じでなくっていいわけなんです。^(j)自分が感じたことを自分の身体で表現する、それがやっぱり根本的に、私が教わった理論と実践。

一般的な幼稚園では先生の見本通りのお遊戯がされていた時代に、附属幼稚園では、「子ども自身が音楽を聞いて、自分の中から出てくる活動」

を重んじる〔下線部(a)〕という違いが示されている。5歳くらいになると、先生から与えられた課題について表現するが、それは教師が教え込むのではなく、あくまでも自発的に子どもの中から生まれてくるものを教師が重んじる〔下線部(b)〕ものであった。また〔下線部(h)〕より、教師自ら、自分の感じたままに表現をするという姿を示すことにより、子どもの自主的な表現につながるという面も伺われた。ナースリースクールの2歳児では、様々な音楽を聞いて子ども達が自由に表現しており〔下線部(c)〕、年齢や発達に応じた「リズム」の活動が行われていたことが窺える。2歳の子どもの表現は、異なる音楽をかけても動いている姿は同じに見えるかもしれないが、子どもにとっては、各々の「音楽を感じて自分のからだを使って表現する」という2歳児の表現の特徴を述べており、教師は「そういうことを大切にしていた」〔下線部(e)〕。図1の写真はM氏から、ナースリースクールの「リズム」の活動時の子ども達の様子であると教えていただいた。



図1 ナースリースクールの子ども達の「リズム」の活動

(北陸学院幼稚園創立100周年記念写真編集委員会編、『創立100周年記念1886～1986』、1986年、p.32より引用)

この写真からわかるように、子ども達は皆各々自由に身体で表現しており、それは、教師が教え込むのではなく、「こうしなさい」と言うのでもなく、子ども達に「感じさせる、感じ取らせる」のであり〔下線部(g)〕、「子どもの自由な感じ方とか発想とかそういうものを、とにかく大切にする保育」〔下線部(f)〕であったことがわかる。ま

た、興味深いのは、感じたことを表現するのは子どもだけでなく、先生や実習に来ている学生も身体で表現していたこと〔下線部(d)(h)〕であり、子どもは先生や実習生のような大人が表現するのを見て、また何か感じて表現するという点である。このように音楽を感じて自分のからだを使って自由に感じたことを表現する活動は、「だからみんな同じでなくっていいわけ」〔下線部(i)〕であり、この点が、歌を聞いて先生のお手本通りに皆で同じ様に動くことを、子ども達に強制するお遊戯とは根本的に異なるのである。

M氏は、下線部(f)、下線部(j)のような保育をウィンから学び、南からは理論を学び、現場の教員として実践していたことが示された。

(2) A氏とY氏の「リズム」の活動における音楽

北陸学院の幼稚園では保育の中でピアノが使われる。A氏とY氏の「リズム」の活動における音楽の用い方や考え方について以下のように語られた。

問：自由表現の時、ピアノを弾いて活動されたのですか。それとも言葉だけですか。

A：弾きながら見て。

問：弾きながら見て、司会しながら見るのですか。

A：「どんなふうに踊っているのかな」って。

Y：司会している先生も弾けるかもしれません。私は弾けませんので、いつも弾いてもらいましたけれどね。だから自分で子ども達の様子を見て、(a)小さければ小さいほど、活動の差が違わんです。基本的な活動、歩くにしても、ピッチ差がありますし、片足跳びもやっどできる子もいますし、すらすらと本当にできる子もいますし、その差がすごく激しいんです。だから、そういうことをよく見ながら、その子にあったテンポで弾いてあげる。南先生に私ピアノも弾けないからって言ったら、「(b)何言ってるの、歌えるでしょ、楽器があるでしょ、ピアノじゃなくてもいろんな楽器があるでしょ」って。それだけでもリズムっていうんですね。私は弾けなくて苦労しました。

問：では、ピアノを弾く先生がいて司会をするこ

ともあり、1人でピアノを弾きながら、子ども達を見ながら司会をすることもあるのですね。

A：私はそれ（1人でピアノと司会）をしました。

Y：(c)生の音は大事ですけども、レコードを選んで、特に自由表現する時はレコードをかけて、子どもにとってもね、オーケストラの演奏でね。

A：(d)音の厚みがね、音楽が鳴っていると子ども達も感じられるものねえ。ピアノなんかよりも。いろんな楽器が入ってますでしょう。そうしたら、「はあー、こういう音がでるんだ」と。わかるんですね、子どもって。

A氏とY氏の話から、「リズム」の活動の時、1人でピアノ伴奏をしながら司会をする先生と、2名で伴奏と司会を分けて行う場合があったことが示された。いずれにしても、教師は子どもの様子をよく見ながら進めており、子どもの運動能力差を考慮し、その子にあったテンポで弾く〔下線部(a)〕、すなわち子どもの動きにピアノの音を合わせている。しかし、ピアノを演奏しなければならないのではなく、教師が弾ける楽器なら何でもよいという柔軟性も示されており、子どもの自由な表現を引き出すためには、教師自身も型にはまらない考え方が求められていることが、南氏の助言より示されている〔下線部(b)〕。

また、自由表現の時は特にレコードをかけてオーケストラの演奏など音楽を使用〔下線部(c)〕している。それは、ピアノだけでは出ない音の厚みや様々な楽器による音の違いを子ども達が感じとることであり〔下線部(d)〕、自由に表現する活動の場合、音楽を感じとる感性を重要視していたことが窺える。

2. 自由な表現

Y氏により、なりきって自分の表現をしている時の子ども達の様子が生き生きと語られた。

Y：音楽や、お話で、それになりきってしまう3歳児の特徴があるんです。ですから、音楽でも、お話でも大好きなお話ですと、入り込んでしまったら、(a)もう、一日(子ども達は)その

役になっているんです。それで、^(b)次の日も、先生が「また子豚さんになる？（筆者注：3びきのこぶたのお話）」と言うと、（部屋に）急いで入ってきて、自由遊びの時から子ぶたのおうちを作って。そして、狼が好きな子が狼になる。その後「みんないらっしやい」で（全員が）集まって、^(c)トイレに行くのですけれど、その歩く時からそれ（お話の役）になっているんです。それでずーっとお帰りの時までその役になりきっている。かわいらしいんです。それだけ自分の表現ができて、（それだけ自分の表現が）できたらねえ。それは3歳児の特徴かもしれないですね。

音楽やお話を聞いてそれになりきっている3歳児の中に生まれたイメージを、決められた活動時間内で終わらせるのではなく、子どもがお話に入り込んでいけば、一日中であってもなりきることを見守り続けている教師の姿が窺われる〔下線部(a)〕。これは、前項のM氏による、子どもの自由な感じ方や発想を、とにかく大切に保育に通じるものであろう。また、次の日の活動として持続するために、教師から子ども達にさりげなく誘いかけている。そのことで、周りの子ども達との活動へとつながっている姿が伺われる〔下線部(b)〕、トイレに行く時、帰る時とイメージは持続し〔下線部(c)〕、これは子どもの遊びと生活が連続している保育の在り方を示すとも解釈できる。

3. 言葉がけ

保育において、教師による言葉がけは重要であるが、それは身体表現においても同様である。「リズム」の活動における教師の言葉がけに関して以下のように語られた。

問：先生方は、よく考えて言葉をかけていらしたのですか。

A：やっぱりそうですね。

Y：すごく大事だと思います。

A：ねえ。

Y：一番大事っていうか、姿勢とね。

A：言うことで、子どもも先生にはたらきかける。

問：どんな言葉がけしようかって、ずっと考えているのですか。

A：そうしなければいけないと思っていることもありますし、とっさに出てくることもあります。

問：リズムは先生が言葉をかけたことで表現がぐっと変わりますよね。

A：^(a)子どもの「考える」っていう力が出てくる。
^(b)こちらがこうしたらいいと思っても、一応、子どもはどう考えるんだろうと。

Y：子ども同士の話し合いっていうか、「〇〇ちゃんはこう言っているけれど、どう？」とか、会話を進めていくと違う方向にいったり。

A：大人ばかりではなくね。

問：先生から子どもにではなくて、子どもからですね。子どもの会話や子どもの会話の間に入りますね。

A：自由な表現の時でも、（子ども達が）各々に表現していて、「〇〇ちゃんこんなふうにしたのよ。ちょっとやってみて」って、^(c)みんなに見てもらおうとか。そうすると刺激になったり（表現したり）して。「自分もやってみよう」っていう気がね。

問：先生が全部答えを出すのではなく、先生の答えは一応あるけど置いておく？

A：^(d)引き出す。

問：そうすると子ども同士で自由に？

A：^(e)そうそう。そうするとだんだん子ども自身で考えるようになる。「友達はああ言っている。それなら、今度どうしようかなあ」って考えてる。

問：なるほど。「考えているなあ」っていうのもわかるんですか。

A：ええ

Y：^(f)ああ、考えているなあって。

A：^(g)笑わないで黙ってみてるんですけど。

Y：ええ。

問：そして、またそれを受けてまた何か出てきたら。

A：そうそうそう。出てきたら、^(h)「あら素敵ね」とかね。

Y：⁽ⁱ⁾全く逆のことを言ってみるとか、そういうことも1つ。そうすると（子どもは）「こっち

がいい」とかね。

表現活動の上で言葉かけとして重要なのは、教師が一方的に指示するのではなく、「こちらがこうしたらいいと思っていても、一応、子どもはどう考えるんだろう」〔下線部(b)〕と、子ども達の考える力を引き出す〔下線部(a)(d)〕ことである。そうすることにより、子ども達からの自由な発想を引き出すことができる。また、教師が子どもの動きを他の子ども達に紹介して見てもらうこと〔下線部(c)〕については、子どもたちの感性がさらに刺激しあい、より創造的なイメージが生まれることも考えられる。時にはゆさぶりをかけて、あえて全く逆のことを言ってみることも大切である〔下線部(i)〕。さらにそのコミュニケーションの過程の中では、タイミングを見計らってほめる〔下線部(h)〕ことも援助法として示された。そのようなプロセスの中で、子どもは自分で考えるようになり〔下線部(e)〕、考えている姿を見て教師は「ああ、考えているな」〔下線部(f)〕と黙って見守り〔下線部(g)〕、子どもの中から何か出てくればまたそれを受けて言葉を投げかける。このようにして、子ども達自身で考え、行動を起こす力を自由な表現の活動を通して、子どもの中から引き出していく保育姿勢が窺える。

4. 言葉かけと音楽

インタビューの中で、前項1.と3.に記載した、レコードやピアノなど音楽を媒体とした「リズム」の活動と言葉かけに関する話が出た。そこで、実際に子ども達の自由な表現を引き出すために、言葉かけだけで活動を進めることが可能かどうか尋ねてみた。

問：先生の言葉かけだけで子ども達の表現をずっと引っ張っていくような事もあるのですか。

Y：(a)時によってはそういうこともねえ。

A：(a)時によってはあるかもしれませんねえ。
(子ども達に) この間はこうだったから、今度はこうしてみようとか。

問：子ども達への語りかけだけで引っ張っていく活動もあるのですか。

A：(b)たまにはね。

問：たまには、ですか。

A：と思うんですけどね。

Y：劇あそびなどは、先生がリードして、そしてその間に、「こんな音楽が入ったらいいかなあ」って、「(音楽)ないかなあ」って、その^(c)音楽を用意して、そうすると盛り上がっていく。

A氏、Y氏共に、言葉かけだけで子ども達の自由な表現を引き出しながら進めることは、「時によって」〔下線部(a)〕や「たまには」〔下線部(b)〕であり、教師の言葉かけによる一方的な進め方はほとんどなされていないことが窺われた。それは、子どもの自由な感じ方や発想を大切にすると共に、先生自身も感じたものを表現し、その姿を子ども達が見て更に子ども達が表現する付属幼稚園の保育によるものであろう。また、言葉かけにおいても、子ども達が自身で考え、行動を起こす力を子どもの中から引き出していこうとする教師達にとって、言葉かけだけで自由表現の活動を進めることは少ないことが窺われる。劇あそびのように先生がリードする場合においても、音楽を用いることで子ども達の活動が盛り上がる〔下線部(c)〕と発言しているところから、自由な身体表現における音楽の有効性が示されたといえよう。

V まとめ

以下に、本研究の目的であった、付属幼稚園の教師の「リズム」への理解と、具体的な活動への展開について、インタビューから明らかになったことをまとめ、付属幼稚園における「リズム」に関する考察を試みたい。

他の一般的な幼稚園では、教師の見本通りのお遊戯がされていた時代に、付属幼稚園では、子ども自身が音楽を聞いて、自分の中から出てくる活動が重んじられている。それは、教師が教え込むのではなく、子ども達に感じさせたり、感じ取らせたりするのであり、子どもの自由な感じ方や発想を大切に保育であった。それは、子ども達だけではなく、教師や実習に来ている学生も感じたことを子ども達と一緒に身体で表現し、子ども達は大人が表現するのを見て、また何かを感じて表現しており、他の幼稚園で行われていた遊戯と

は全く異なる活動であったことが窺える。

「リズム」の活動の時、教師は活動を導くだけでなく、ピアノの伴奏も担っている。それは、1名でピアノと司会の両方を担う場合もあるが、2名の教師で司会とピアノを分担して行う場合もある。いずれにしても、教師は子どもの様子をよく見ながら進めており、子どもの動きにピアノの音を合わせるように伴奏している。ピアノの生演奏ばかりではなく、自由に表現する場合には、レコードをかけてオーケストラの演奏による音の厚みや様々な楽器による音の違いなど、音楽を感じ取る感性も重視していたことが示された。

子どもの自由な感じ方や発想を大切にしている保育は、音楽やお話を聞いてなりきっている3歳児がお話に入り込んでいけば一日中も見守り続け、次の日もさりげなく誘いかけて周りの子ども達との活動につなげるなど具体的な保育実践にも見られた。

表現活動を行う時の言葉がけは、教師が一方的に指示するのではなく、「子どもはどう考えるんだろう」と考え、子ども達から自由な発想を引き出していた。それは、子ども達の考える力を引き出すということであり、このようにして、子ども達自身で考え、行動を起こす力を自由表現の活動を通して子ども達の中から引き出す保育姿勢が窺われた。

自由な表現を引き出しながら活動を進める場合、教師の言葉がけによる一方的な進め方はほとんどされていない。それは、劇あそびのように教師がリードしていく場合においても、音楽を用いることで「盛り上がっていく」と発言しているところから、自由な身体表現における音楽の有効性が示されたと言えよう。

M氏、A氏、Y氏とのインタビューの中に「自由な表現」や「自由表現」という言葉がよく使われていた。『幼稚園のための指導書 音楽リズム』は、幼稚園教育要領（昭和31年）の指導書として位置づけられているが、同書に記載されている動きのリズムの指導方法として、「基礎的指導」、「自由表現の取扱」、「多面的な取扱」が挙げられている。「自由表現の取扱」に関する記載は以下の通りである²¹⁾。

歌や楽器遊びにおいて、幼児の自由表現を尊重するのと同様に、リズムにおいても、見たこと、感じたこと、考えたこと、またはからだで感得したリズムを、自由に自然に表現することは、リズム指導の上に重要なことである。一般的には幼児は想像性・模倣性に富むが、まず、その表現はきわめて衝動的、断片的で、単独表現にとどまる程度である。したがって、幼児が表現したい欲求およびその能力を、じゅうぶんに発揮できる環境やふんい気をつくるのがたいせつである。そうして、あせらず、急がず、自由画をかかせるつもりで、適宜自由表現の取扱を加えるよう心がけるならば、むりなく能力をのばすことができる。その取扱について注意を示すと次のとおりである。

- ・音楽に耳を傾ける
- ・音楽から感じたとおりに自由に動くようにする。その動きは歌詞の意味の直訳にならないように注意する。
- ・幼児自身の想像を尊重し、幼児が新しい動きを発見する。
- ・ときには教師も幼児といっしょになって動くようにする。
- ・一つの舞踊の型やかっこうにとらわれないように思い思いのことを自由に行う。
- ・自由な表現を尊重するとともに、協同動作に親しむ。
- ・自然な動きを強調するような音楽を用いる。(歩き方・走り方・とび方・すわり方・立ち方・向きのかえ方など)
- ・動きの主題と音楽とを与え、即興的に動作をする。
- ・大きくのびのびとした動きで行う。
- ・幼児の生活環境のなかから、動物や機械や仕事などのリズム型を見つけだし、それを動きのリズムで表現する。

記載されている内容一つ一つをインタビューの内容と照らし合わせることを敢えてここではしないが、インタビューで話された内容とほぼ同じと言っても過言ではないであろう。特に最初の記述「歌や楽器遊びにおいて、幼児の自由表現を尊重

するのと同様に、リズムにおいても、見たこと、感じたこと、考えたこと、またはからだで感得したリズムを、自由に自然に表現することは、「リズム指導の上に重要なことである」は、インタビューの中でM氏、A氏、Y氏から何度も話された内容であり、取扱の注意として挙げられている項目はインタビューの中で具体的な保育として語られていたこととほとんど同じである。

以上のことから、遊戯が一般的であった他の多くの幼稚園において、「リズム」や「動きのリズム」は十分に理解されず、混乱を招いたと言われているが、付属幼稚園の教師は十分理解し具体的な保育活動として実践していたことが示された。

その理由について、本研究で得た内容から推察を加えるならば、保育短期大学の開学により、付属幼稚園の幼稚園教諭の養成が可能になったことやインタビューの中に出てきた、ライザー、ウィン、南が、保育短期大学と付属幼稚園の両方で幼稚園教諭の指導に関わったことが挙げられよう。特に南はライザーから北陸学院の幼稚園の形骸化したフレール保育を一新させることを頼まれており、南が来たことでそれまでの北陸学院の保育が少しずつ変わっていることから、南による付属幼稚園の教師たちへの関与が示唆される。

VI 今後の課題

「リズム」という活動が英和幼稚園で行われていたことが資料から明らかとなった。また、本研究において付属幼稚園以降、北陸学院の幼稚園では保育の中で「リズム」は身体的な活動として行われていることが示された。しかし、英和幼稚園から付属幼稚園までの間保育実践として何らかの継承がなされていることに関する十分な資料が得られなかったため、現時点ではあくまでも推察の域を出ていない。今後の課題としたい。

謝辞

本研究のためにインタビューにご協力くださいました3名の元北陸学院保育短期大学付属幼稚園の先生方に心より感謝申し上げます。インタビューでは幼稚園教諭時代の保育が生き生き語られ、先生方の目の前にいる子ども達の様子が目に浮かぶようでした。また、保育の実践はどれも素

晴らしく、貴重なものでありました。先生方のご協力がなければ本研究はできませんでした。

改めまして心より深く感謝申し上げます。

〈引用・参考文献〉

- 1)園田順子、山口茂嘉、幼稚園教育要領における身体表現の取り扱いの変遷に関する一考察、『日本保育学会第50回大会研究論文集』、1997年、pp.908-909.
- 2)本山益子(他)、保育における身体表現－保育学会における1990年以降の研究発表より、『日本保育学会第54回大会研究論文集』、2001年、pp.92-93.
- 3)田邊圭子、『幼稚園のための指導書 音楽リズム』(昭和28年)刊行過程の研究(1)－戦後教育改革期における「遊戯」刷新の動きと坂元彦太郎の「リズム」の構想(昭和22年－23年)－、北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要第7号、2014年、pp.67-74.
- 4)田邊圭子、『幼稚園のための指導書 音楽リズム』(昭和28年)刊行過程の研究(2)－保育要領改訂委員会資料(昭和24年)と関係者へのインタビュー調査から－、北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要第8号、2015年、pp.69-82.
- 5)坂元彦太郎、「音楽リズム」の成り立ちについて、幼児の教育59(6)、1960年、p.4.
- 6)坂元彦太郎、「保育要領改訂委員会」－指導書『音楽リズム』の刊行、『戦後保育史 第1巻』、フレール館、1980年、p.109.
- 7)田邊圭子、『幼稚園のための指導書 音楽リズム』(昭和28年)刊行過程の研究(3)－昭和24年10月以降の刊行経緯から－北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要第9号、2016年、p.55.
- 8)小林恵子、『日本の幼児保育につくした宣教師 上巻』、キリスト新聞社、2003年、pp.216-217.
- 9)北陸学院100年史編集委員会、『北陸学院百年史 別冊』、学校法人北陸学院、1990年、p.537.
- 10)北陸学院100年史編集委員会、『北陸学院百年史』、学校法人北陸学院、1990年、pp.96-97.
- 11)梅染信夫、北陸学院の先達たち－創立と発展に寄与した人々－、学校法人北陸学院、2015年、p.110.
- 12)前掲書9)、p.300.
- 13)同上書、p.300.
- 14)同上、p.537.
- 15)前掲書10)、p.46.
- 16)前掲書11)、p.99.

- 17) 同上書、p.100.
- 18) 南信子、『花の蕾のひらくとき』、2000年、pp.391-392.
- 19) 同上書、p.392.
- 20) 同上書、pp.19-20.
- 21) 文部省、『幼稚園のための指導書 音楽リズム』、1953年、pp.23-24.

